



石井病院

じんけいクリニック

Now Vol.116

- Since 2008

JINKEIKAI NEWSPAPER

発行：2017.11

『第58回日本脈管学会総会』にて、石井 洋光 院長 が発表を行いました

第58回日本脈管学会総会が、10月19～20日の日程で名古屋国際会議場にて開催され、昨年に引き続き、当院 石井院長が発表を行いました。

今回の演題は「**高齢者一次性大伏在静脈瘤に対する当院の手術検討**」とし、75歳以上の高齢者を対象に当院での下肢静脈瘤の低侵襲治療（※）に関して結果をまとめました。

※ 低侵襲治療とは、患者様の身体に与える負担の度合いをできるだけ低くする治療のことです。

● 要旨

近年、急速な高齢化の進行に伴い高齢者の下肢静脈瘤手術症例も増加している。

術式に関してはレーザー焼灼術、高周波焼灼術と血管内焼灼術が主流となっている。

一方、従来よりの切開して施行している下肢静脈剥去術（ストリッピング術）も最近では血管内焼灼術と同様、麻酔の工夫により日帰り手術も可能となっている。

そこで今回、2015年5月より2017年3月末まで当院で行った手術324肢のうち、75歳以上の高齢者群84肢に対する検討を行った。

結果は、術前併存疾患の頻度の高い75歳以上の高齢者においても術前の全身状態を十分に評価し、麻酔管理を適切に行えば、血管内焼灼術の適応外の場合もストリッピング術は高周波焼灼術と同様、低侵襲ですぐれた術式と考えられた。



（発表会場にて）

- 当院では **様々な足のお悩み** に対して「**下肢静脈瘤外来**」及び「**フットケアサポート外来**」等を開設しています。

	月	火	水	木	金	土
午前	中尾	石井 9:30～	石井	中村 9:00～11:00	中尾	石井 (1.3.5週) 中尾 (2.4週)
午後	石井		中尾 15:00～	中村 西本		

・足の症状が気になる方は上記の外来を受診下さい。足に関する各専門外来のパンフレットもご用意しております。

乾燥肌の診断・治療は「皮膚科」へ ～ 11月は肌が乾燥しやすくなる時期です ～

11月は気温と湿度が下がり、肌から水分が蒸散する量が増加し肌の乾燥が急激に進む時期です。

かさつき、痒み、肌荒れ等、気温や外気の湿度、暖房の状況で乾燥肌の進み具合は違いますが、特に加齢とともに乾燥肌傾向が顕著になってきます。

肌は、乾燥した環境に置かれると、数時間のうちに角質の水分量が減少し、皮膚表面のきめが粗くなり、シワが出現する事が分かっています。すると乾燥する事によって、様々な刺激から守ってくれる肌のバリア機能が損なわれ、より多くの刺激を直接肌を受けることになります。

痒みは肌の比較的浅いところで感知され大脳皮質で認識されますが、肌が乾燥するとわずかな刺激でもより多く痒みとなって大脳皮質に伝達されるようになります。

更にバリア機能が損なわれることによって、より多くの刺激にさらされ、痒み刺激は量的にも増すことになります。痒くてついつい掻いてしまいがちですが、この行動が痒みを感じる神経線維をさらに活性化し痒みを増強させ病態の悪化を招きます。端的に言えば、掻けば掻くほど痒くなり症状が悪化するのです。

乾燥肌にも様々な症状があります。それぞれの特徴に合ったケアが必要で、間違ったケアを続けるとなかなか治らなかつたり悪化したりする場合があります。自分の乾燥状態がどのタイプになるのか、早めに皮膚科を受診し的確な診断と治療を行いましょう。





じんけいクリニック 経皮的血管拡張術 (PTA)

比較的隣接した、時に全く離れた動脈と静脈との間に、直接、時に人工血管で、あえて非生理的な長径5～10mmの瘻孔を作製する手術をシャント手術と呼びます。

動脈は単位時間あたりの血流が多い反面、全て筋膜の下に存在するため、見えにくい、ゆえに刺しにくい、抜針後の止血がしにくいという面があり、一方静脈は血流は少ないものの皮下の静脈であれば容易に視認可能、ゆえに穿刺が容易、抜針後の止血も容易といった面があります。約50年前、この手術が開発されたことで、それぞれの長所を生かし、解剖学的に穿刺しやすい静脈に流れの多い動脈血をショートカットし流入させることができ、結果として100～200mL/分の体外循環血液量を安定して得ることが可能となったのです。血液透析を長期的に継続可能とした人類の英知でした。

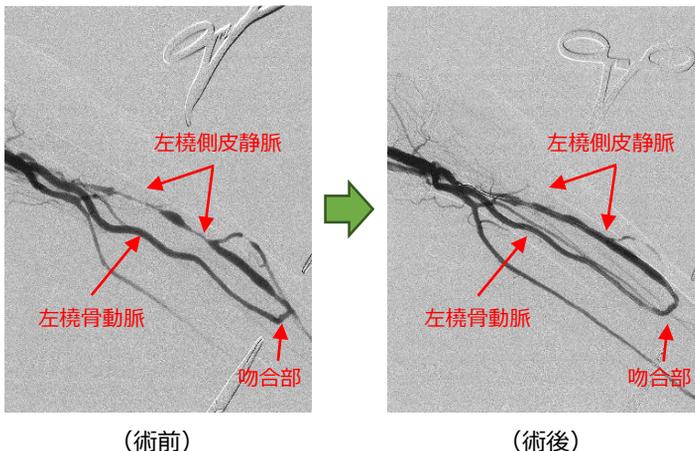
しかしそこにはまた新たな問題がありました。そう、シャント手術は非生理的なのでした。そのため(とは断言できませんが)、一度作製しても徐々に静脈内に狭窄が発生し血液量が低下したり、時に完全に閉塞したりすることも当初から稀ならず認められました。小生が医師となった27年前は一度作製したシャントが駄目になれば、また違う部位で再作製する以外に方法はありませんでした。しかしこの15年ほどは、この狭窄部を血管内からの風船で膨らませ内腔を拡張させることで、今のシャントを永くもたせうる方法が普及してきました。いわゆる経皮的血管拡張術(PTA)です。基本的な手順は下記の如くで、手術時間は30分～1時間程度、全例日帰りで施行可能な手技です。

- ① 皮膚を切開することなく、血管内に外径1.3mmほどの針(アクセスシース)を刺入
- ② シースから造影剤を血管内注入しレントゲン高速撮影で狭窄部の位置、程度を確認
- ③ シースからガイドワイヤーを挿入し、押しと回転の組み合わせで狭窄部を通過させ
- ④ これをガイドに風船のついたカテーテルをレントゲン透視下に誘導
- ⑤ 狭窄部で風船を直径4～6mm、内圧2～10気圧程度、1～2分×1～2回で拡張させる

以上のような手技ですが、当院では小生が関連の石井病院アンギオ室で年間50件ほど施行し、結果も良好です。



じんけいクリニック
院長
ふくし よしひこ
富士 剛彦



比較的最近施行した患者さんの手術前後の血管造影写真です。左橋側皮静脈に2か所ほど著明な狭窄を認めましたが、術後はきれいに拡張されています。

手技的には簡単でもあり難しくもあり奥の深い手術ですが、拡張しすぎない、ほどほどの拡張の方が結果が良いという印象があり、今後も必要な患者さんには、ほど良いタイミングで過不足なく施行していきたいと考えています。

■ 医療連携相談室

TEL 078-918-1512 FAX 078-918-1725
平日 9:00～12:00 14:00～19:00
土曜 9:00～12:00
担当 酒見 古門 上野

編集・発行

医療法人社団 仁恵会 石井病院 広報委員会
〒673-0881 明石市天文町1-5-11
TEL 078-918-1655 FAX 078-918-1657
<http://jinkeikai-group.or.jp/ishii/>